

令和2年度学内公募研究（発展型）
〔研究紹介〕

ルーラルエリアのワーク・ライフ・ジョイ
宮城の農村から

大沼 正寛¹⁾, 林 弘樹²⁾, 田澤 紘子³⁾,
阿部 正⁴⁾, 菅原 玲⁵⁾

Consideration about Traditions and Changes of Places of Daily Works, Lives and Joy
in Miyagi Rural Area with Collaborative Research on Integrated Design
for Rural-based Crafts, Architecture and Surrounding Sceneries

Masahiro ONUMA¹⁾, Hiroki HAYASHI²⁾, Hiroko TAZAWA³⁾,
Tadashi ABE⁴⁾, Rei SUGAWARA⁵⁾

Abstract

The authors have observed and considered places (ateliers) of daily works, lives, and joy in the rural area of Miyagi prefecture as extant examples of sustainable lifestyles. These rural ateliers--farmers, charcoal makers, fisherpersons etc. --have extensive networks of activities and carry out various works, recreations or tourisms in collaborations in spite of their dispersed locations. Their "half-trad" lifestyles may indicate not only sustainability but also a new way of coping with distance in the time of "With and after Covid-19."

1 はじめに

これまで筆者らの共同研究においては、SDGsに関係の深い「自然環境から資源を得て価値を生み出す『地技』をもとにした生業」に根幹を置き、それらが分散ネットワーク型の新たな産業社会の礎となる可能性を模索すべく、主に空間の持続性に着目しながら現状・歴史を明らかにする事例調査を進めてきた^{i ii iii)}。本研究は、陸前地方周辺に広がる村落

-
- 1) ライフデザイン学部 教授・生業景デザイン研究所長
Prof., Faculty of Life Design
 - 2) ライフデザイン学研究科デザイン工学専攻 大学院
Grad. School Stu., Faculty of Life Design
 - 3) 公財・仙台市市民文化事業団 スタッフ
Staff of Sendai Cultural Foundation
 - 4) ノーマルデザインアソシエイツ 代表
Architect, Normal Design Associates
 - 5) 東北工業大学地域連携センター
Center for Regional Collaboration

形態「散居」に示唆を得て、フィールドに赴いて、配置・形態などの空間調査をもとに新たなルーラルデザインに資する知見を発掘、再考することを目的とする。

いわゆる都市生活者は、Covid-19により生活の変化を余儀なくされているが、この地方の農村では散居の村落形態が発達しており、互いに離れた家々が共同して、日々の仕事や暮らし、そして祭りや憩いを重ねてきたとも捉えられ、With & After Covid時代に入り、その対応力には示唆が認められる可能性もある。互いに離れて協力しながら後世に活かされる価値を生む、そうしたライフデザインの可能性を構想するものである。

2 調査研究と関連プロジェクト研究等

フィールド巡見が制限された状況下での調査研究は経験のないことであったが、研究の方向や手法を再考する好機となった。本報では主に以下の5点を記す(図)。

- (1) ルーラルワークプレイス等に関わる継続研究の再定置・再考 (2.1 ①②③④⑤)
- (2) 建築環境保存(宮城県美術館)に関わる身近な活動への参画 (2.2 ⑥)
- (3) 地域に根ざし、地域をつくる建築等に関わる研究課題等の協議 (2.3 ⑦)
- (4) プロジェクト研究所(生業景デザイン研究所)における検討 (2.4)
- (5) その他、教育研究・社会貢献活動のなかで示唆を得たもの (2.5 ⑧⑨⑩⑪⑫)

※ () の○数字は、図中の取扱番号を示す

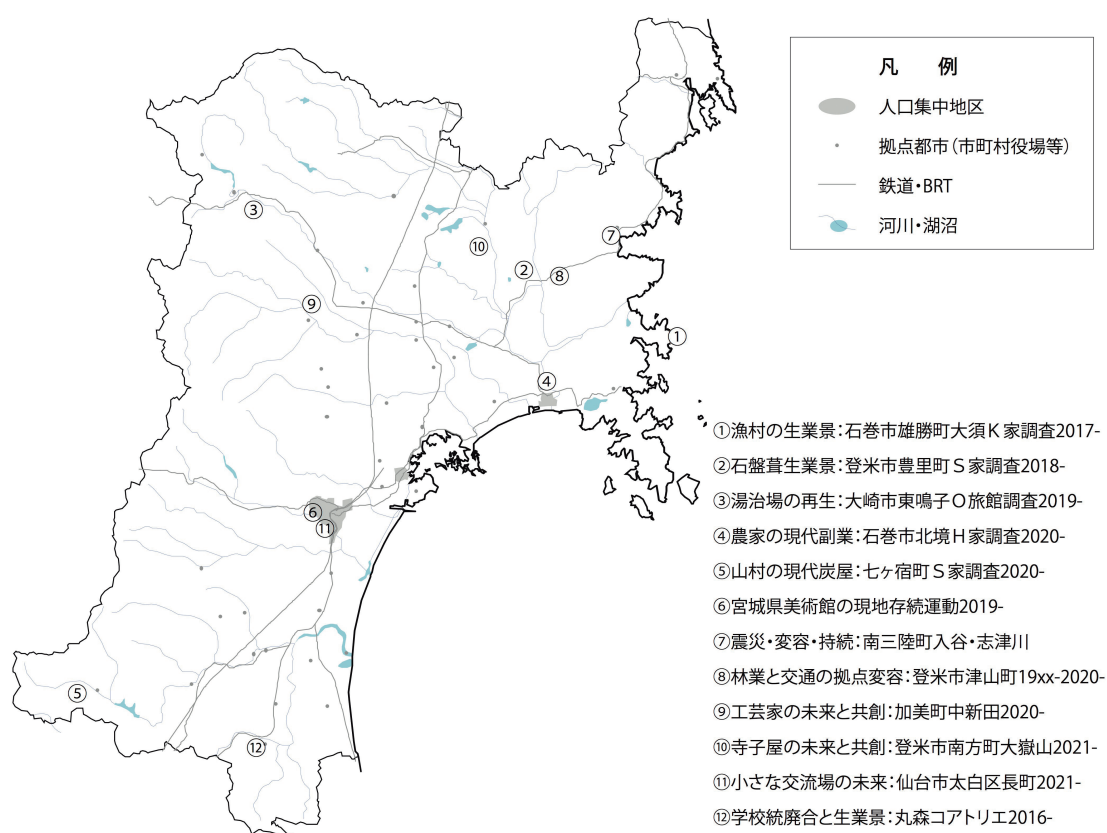


図 散在しながらも相互に関係づけられる生業景デザイン研究所の調査対象地

2.1 ルーラルワークプレイス等に関わる継続研究の再定置・再考

ルーラルエリアの仕事（ワーク）は、地域の資源・環境に依拠し、高度な効率化や分業・外注は容易でなく、個々人には複合的で周囲への配慮がある行動が求められ、結果として地域の持続可能性に寄与している面が少なくない。もちろんその実情は多様であり、むしろ近代の流通経済、現金収入に関わる仕事のほうを主とみるべき家計状況もまた一般的であろう。しかし単に稼いだ金額の主従だけを評価するならば、ルーラルエリアへの定住は非合理的であるから、やはり地域に根ざしてくらしを構築することの良さ、価値規範が存在するはずである。

そこで、地域の資源・環境を活かして価値を生み出す「地技」を活かした生業・活動に着目し、これを支える空間資産をルーラルワークプレイスと呼び、実態調査を重ねてきた^{v vii}。地域の資源・環境に依拠することから、対象は現存する特徴的なものを蒐集することとなり、宮城県内における①漁村の古民家調査、②天然スレート葺き職人の工具と工房、③国内有数の温泉地として知られる鳴子郷・東鳴子温泉の旅館0における湯治文化の変容、といった漁業・工業・商業の事例を採り上げ報じてきた。続いて本年度は、農山村の事例調査として、④社会福祉法人を運営しながら農家を営む親子2世代(写真1)や、地域の名人として伝承される白炭焼き技術を継承した⑤現代炭焼き職人の工房空間（写真2）の調査を実施した。

それぞれの生業は定住的な面だけでなく、出稼ぎ・行商的な面も持ち、①②④など東部沿岸地方の人々が③鳴子方面に湯治に行くことを楽しみにしていたこと（ジョイの側面）や、①において⑤の丸森地方から漁具をつくる竹材を得ていた可能性のある資料が見られること（ワーク／ライフの側面）など、地技の相互関連性を念頭におく必要性が示唆された。

2.2 建築環境保存（宮城県美術館）に関わる身近な活動への参画

前節と併行して参画した動きについて記す。⑥宮城県美術館（写真3）は、近代美術作品群の所蔵等で知られるほか、創作室等の社会教育部門を充実させた点は国内でも先駆とされるが、河北新報2019年11月16日版記事「新県民会館と美術館集約」を機にかつてない県民運動が立ち起こった。筆者は、報道から約3週間後に提出された「宮城県美術館（建物・外構等）の保存活用に関する意見書」（日本建築学会東北支部）の起案・筆耕を行い、その後8ヶ月にわたる多様な個人・団体との協議を経て「宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク」の事務局長を務めることとなった。この運動で、県民らは何を守りたかったのか。特別展で世界的名作の借用が叶う城郭のような安定した立地性をはじめ、環境、建築、芸術などの諸相に偏りなく市民の関心が寄せられ、自らの体験をこ



写真1, 2, 3 （左から）④石巻の農家・⑤七ヶ宿の炭屋の生業景、文化拠点の⑥宮城県美術館

ここに投影し、存続こそが文化を守ること、という意識が発揚されたことは画期的であった。子細は別報^{viii ix)}にゆずるが、諸活動のなかでも特筆すべきは、この団体が行った県内各地の「出前講座（計17箇所）」である。ルーラルエリア各地での熱い声は、宮城県美術館とは仙台市民が専ら利用する文化施設、との疑念を払拭するもので、運動そのものの力となった。そしてそればかりでなく、「あの場所には日常のルーラルライフに対する非日常の『ジョイ』がある」という、ディスタンスを隔ててなお集められる憧憬を示唆するものでもあった。ルーラルエリアのライフスタイルはもはや、前近代的な、寡黙で勤勉で内向的なものではなく、ひろいネットワーク上に構築されているのである。

2.3 地域に根ざし、地域をつくる建築等に関わる研究課題等の協議

筆者・共著阿部が主査・委員をつとめる日本建築学会農村計画委員会ルーラルデザイン小委員会では、共通命題として「地域に根ざし、地域を育てる建築」を掲げ、双方を満たすものを RUBBAR: RUral-Based and rural-Build ARchitecture と呼んでいる。ルーラルエリア（農山漁村・田園地域）に立地する建築・住宅の現在・未来形を主眼とするデザイン論の構築をめざす研究グループで、2020年9月10日には、地域の現場を闊歩する異色の研究者、建築家、修復家らに話題提供いただき、公開研究会・WEB討論「RUBBAR—セトギワ建築論」を行った^{x)}。

幾多の災害を乗り越えて合理性ある配置形態にいたった和歌山の山村や漁村集落、市民からの一声の保存要望で即座に改変中止が指示される台湾の先進的な建築保存現場、復興支援に舞い降りた建築家らと地元の真の声を聴く地域建築家の葛藤（図中⑦）、その時代その地域に入手可能で超低コストな素材から立ち上がる現代建築の可能性など、興味深い講話が紹介された。

ここでは、ワーク／ライフ／ジョイのありよう、形態が、とくに近現代において柔軟に変容してきた可能性と、その一方で、その場所に立脚して暮らしを立てる、という不変・不動の意志が浮き彫りとなった。この、いわば「半伝統（half-trad）」ともいうべき状況が各地で起こりながら、それぞれのサステナブル・ライフスタイルが模索されている、といいかえることができよう。建築家らのリアルが吐露されたWEB討論に「興味深い」との声も多く、全国各地から100人以上が視聴するオンライン催事となった。

2.4 プロジェクト研究所（生業景デザイン研究所）における検討

上述2.1～2.3に述べた内容は、いずれも生業景デザイン研究所にて情報共有した。調査内容を高めるため、また地域づくりに資するため、計4回の会議を実施し、討議を重ねた。リモート技術が進展するなかで現場の意味はむしろ強まるものの、関心層を広げるためには適切な取材・撮影・小動画等と記録・編集が求められる。また、これに対するエフォート率をどう充てるか、現場側の理解や同意も含めて熟考が要る。各地の営みを記録している「とうほく地技カタログ&マップ」を再始動する必要性に帰着した。また、科学技術振興機構・社会技術研究開発センター「多世代共創ハンドブック」において、生業景デザイン研究所の前身研究が報じた成果が多数採録され、一定の社会実装化に寄与できたことも確認した^{xi)}。もちろん共同研究は途上にあり、宮城と秋田を拠点に引き続き調査を重ねていくことで一致した。

2.5 その他、教育研究・社会貢献活動のなかで示唆を得たもの

このほか、主に地域からの研究相談等を通じて、本研究テーマに関連し、今後も検討の意義があると見込まれる以下のフィールド調査対象との関係構築作業などを行った。

- （１）登米市津山町道の駅津山の再生計画など過去の東北工業大学の連携先に対する協力案件に参画し、その基礎的、かつ現代的な事項について他研究所とともに支援協力をしていくこととなった（⑧）。
- （２）上記2.2がきっかけとなって、加美町「工藝藍学舎」の移転再生計画とスレート再利用相談を受け、東北各地の工芸交流拠点としての研究シーズ群に遭遇することができた（⑨）。
- （３）過去の研究成果（宮城県近代和風建築調査等）がきっかけとなって、登米市南方町大嶽山興福寺の書院棟について、研究室学生が同一集落内で再生計画の相談を受けるという好事例に遭遇した。本例は、地域のライフ＆ジョイ（とくに冠婚葬祭の意義）を考えるうえで重要な文化遺産と考えられ、今後調査を重ねていくこととした（⑩）。
- （４）太白区・ながまちヤタイ広場プロジェクトの協力相談（⑪）など、空間造形に関する相談案件を頂き、具体的なライフ＆ジョイの将来像を創出する実践研究に着手した。
- （５）一連の研究の震源地の一つ・丸森蚕糸コアトリエの今後を考えるべく現地協議を重ね、小学校統廃合のなかで空き校舎の活用再生に関する相談案件にも遭遇した（⑫）。
- （６）東北経済産業局より、復興・創生期間後に向けた東北のブランド価値向上および関係人口創出に関する調査事業：東北のブランド価値向上に関するワーキンググループ座長を仰せつかり、ワーク・ライフ・ジョイと生業景の可能性について共感を得ることができた。

3 まとめにかえて

従来の建築学諸研究における業務空間論は、計画性と結びつきやすい近現代建築・住宅論、オフィス空間などのワークスペース論、施設計画論が中心で、都市に均質なオフィスワーカーが無数に存している状況を標準としたライフデザイン論が前提になっていた印象がつよい。しかし筆者は（都市部出身ながら）、この前提が持続可能性論とはあまり整合しない、偏った認識ではないかという疑問を根底にもち続けてきた。こうした点から本研究では、宮城県内をはじめとした散居地方を念頭に置きながら、ルーラルエリアのワーク・ライフ・ジョイを総合的に考察した。分散しながらもゆるやかに相互連携しているのは、ワーク面における資材調達や商品供給・流通、ジョイ面における憩い・遊び・祭礼・文化などの各所に、営みを開いていく（ネットワークのなかに定置する）必要があるからであろう。いっぽう本研究でいうライフとは、日常生活を指しているから、これは定住的、土着的な面がつよく、貨幣経済合理性のみではない価値規範のもとに、現在地での持続性を志向している。これらの複合性と多様性は、ルーラルエリアのサステナブルライフデザイン論における一つの仮説となろう。

謝辞

本研究は、東北工業大学学内公募研究^{iv)}に採択いただいたことで可能になった。記して謝意を申し上げたい。また、母体となった前身研究ⁱ⁾、その後の学術的検討の中心となる関連研究ⁱⁱ⁾、学会委員会、宮城県内外におけるプロジェクト研究および諸活動をともにした方々の存在なくしては成立しなかった。関係する全ての方々に、心から感謝申し上げます。

注・文献等

- i) 大沼正寛（研究代表者）：農山漁村共同アトリエ群による産業の再構築と多彩な生活景の醸成，科学技術振興機構・社会技術研究開発センター「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域研究開発プロジェクト，2016-2019および後継プロジェクト研究所「生業景デザイン研究所」（<https://ru-cas.jp/>）
- ii) 大沼正寛：ルーラルワークプレイスの基礎的研究－その近現代史と活用保全の要件－，科学研究費（基盤C），2019-2021
- iii) 大沼ほか9名：生業景の実践課題抽出・みやぎルーラルヘリテージの活用保全－生業景デザイン研究所の研究紹介とともに，東北工業大学学内公募研究，地域連携センター・研究支援センター紀要『EOS』Vol.33 No.1，2021年3月
- iv) 大沼正寛（研究代表者）：散居地方の生業景とルーラルデザインの再考－ワーク・ライフ・ジョイの近代と近未来－，2020年度東北工業大学学内公募研究
- v) 林弘樹・渋川成哉・大沼正寛・阿部正・竹内泰「陸前沿岸地方におけるスレート民家の配置・平面と生業の関係 石巻雄勝大須K住宅をもとに・その1」日本建築学会大会（北陸）学術講演梗概集6062，pp129-130，2019年9月
- vi) 林弘樹，阿部正，大沼正寛：天然スレート葺き職人の工具と工房－ルーラルワークプレイスの事例的研究－；日本建築学会大会学術講演（関東），2020年9月
- vii) 佐藤優作，大沼正寛，阿部正：宮城県大崎市東鳴子・川渡温泉の再生のための基礎的考察－旅館Oと湯治文化の変容に着目して－；日本建築学会大会学術講演（関東），2020年9月
- viii) 飛ヶ谷・速水・崎山・大沼「東北地方における戦後建築の保存と活用に関する近年の取り組み」日本建築学会大会建築史・建築意匠委員会資料，2021年9月
- ix) 宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク編「みんなでまもった美術館－宮城県美術館の現地存続運動全記録」2021年7月
- x) 日本建築学会農村計画委員会ルーラルデザイン小委員会：オンラインリレートーク&WEB討論「RUBBAR－セトギワ建築論」（登壇者：布野修司氏（元日本建築学会副会長・滋賀県立大名誉教授／建築史・建築論），山崎寿一氏（元同学会農村計画委員会委員長・神戸大教授／農村計画），中谷礼仁氏（早稲田大教授／建築史），渡邊義孝氏（建築家／建築史・保存設計／TV「ふるカフェ系ハルさんの休日」等出演），渡邊菊真氏（建築家・高知工科大准教授／建築設計），平田隆行氏（和歌山大准教授），共著阿部および筆者を含む12名の小委員会委員），2020年9月10日
- xi) 国立研究開発法人科学技術振興機構・社会技術研究開発センター編「多世代共創ハンドブック」2021年3月